

鬼眼鏡と鉄屑ぶとり

続旧聞日本橋・その三

長谷川時雨

青空文庫

堀留ほりどめ——現今いまでは堀留町となっているが、日本橋区内の、人形町通りの、大伝馬町二丁目うしろ後の、横にはいった一角が堀留で、小網町かし河岸かしの方からの堀留なのか、近い小舟町にゆかりがあるのか、子供だったわたしに地の理はよく分らなかつたが、あの辺一帶を杉の森とあたしたちは呼んでいた。

土一升、金一升の土地に、杉の森という名はおかしいようだが、杉の森いなり稲荷の境内は、なかなか広く、表通りは木綿問屋のおおだな大店にかこまれて、社はひっそりしていた。そのかみの東国、武蔵の国の、浅草川の河尻かわじりの洲すのなかでも、この一角はもとからの森であったのかもしれない。ともかく、かなりの太さの杉の木立ち

も残っていた。

社の裏の方は、細い道があつて、そこには玉やという貸席や、堅田という鳴物師などが住んでいて、なま艶めかしい空気があつた。ずつと前には、この辺も境内であつたのであろう。それゆえか、その細道には名がなくて、こうじ小路を出たところの横町がいなり新道と
いうのだつた。以前もとの葺屋町、堺町の芝居小屋ざへの近道なので、その時分からこの辺も、そんな柔らかい空気の濃厚な場所だつた
かもしれない。そしてまた、この杉の森は、きようほう享保のころ、芝居する『恋こいむすめむかしはちじよう娘昔八丈』や『梅雨つゆこそでむかしはちじよう小袖昔八丈』などの白木屋お駒——実説では大岡裁判の白子屋お熊の家であつた場所であり、お熊の家は材木商であつたのだから、堀留は、深川木き

場の材木堀のように、材木を溜めておく置場にもなっていたのかもしれない。

こんな、あぶなっかしい地理より、ここに『江戸名所図絵』がある。これによると、杉の森稻荷社所在地は、新材木町で、社記によれば、相馬将門そうままさかど威を東国に振り、藤原秀郷ひでさと朝敵誅ちゆうばつ伐ほろぼの計策をめぐらし、この神の加護によつて将門を亡したので、この地にいたり、喬々きようきようたる杉の森に、神像を崇め祀つたのだとある。

そこで、早のみこみに、下町は、江戸時代に埋めたてたのだから、いくら杉の森といつても、その後植林したのだなどという誤解はなくなるわけだ。だが、稻荷さんといえは、伊勢屋稻荷に

犬の糞くそと、江戸の名物のようにいわれたほど、おいなりさんは江戸時代の流行はやりものだが、秀郷祀るところの神さまと、どうして代ったのかというと、それにも由縁ゆえんはあるが、廂ひさしをかした稲荷の方へ、杉の森の土地をとられてしまった訳だった。

それは寛正の頃、東国大おおに旱魃かんばつ、太田道灌おおたどうかん江戸城にあつて憂い、この杉の森鎮座の神にお禱いのりをした験しるしがあつて雨降り、百穀大みのに登る。依よって、そのころ、山城国稲荷山をうつして勸かん請じようしたというのだが、お末社が幅をきかしてしまつて、道灌どうかんが禱たごつたという神の名も記してない。秀郷祀るところの御本体も置いてない。だが、附記にも、昔杉の木立いと深かりしなりとある。あたしも子供の時分、四月十六日のお祭まつり奠まつりに、杉の木へ寄りかか

つて神樂かぐらを見た覚えもあざやかに残っているし、小僧が木の幹にしがみついて、登って見ていたのも覚えているから、幾本かは、幾度かの江戸の大火にも、焼け残つて芽をふいていたものと思われる。

堀留は、地名辞書によると、堀江、または堀留江、伊勢町堀ともいう、日本橋川の一支出、北にほり入ること四、五町ばかりとある。

前置きは長くなつたが、そのほとりの大店おおだなは、夕方早くから店の格子を入れてしまう。この格子は特長のあるいいものだった。一、二寸角の、荒目の格子で、どつしりとした黒光りの蔵造りの、間口の広い店は、壮重なものにさえ見えた。灯ともし火がつけば下の

方だけの大戸が下りて、出入口は、引き戸へ潜り口くぐのついたのが一枚おりている。上の方は、暑中でなければ油障子がおろされ、家の中からの灯が赤く、重ったくうつつて、墨で描いた屋号の印しるしが大きくうきあがっている。譬たとえば、※丁字星だとか、それが三つ組んでいるのが丁ちようぎん吟ぎんだとか丁ちようじん甚じんだとか——丁字屋甚兵衛を略してよぶ——※やまにだとか、※さつまだとかいうのだった。そうした大店の棟むねつづきで、たてならべた門松などが、師走末の寒月に、霜さに冴さえかえって黒々と見える時は、深山のように町は静まりかえつて、いにしえの、杉の森の寒夜もかくばかりかと思うほど、おぞけ竦毛おぞけの立つひそまりかただった。

いま、ここに、ちよつと出てくる杉本八重さんも、そうした大

店のお嫁さんだったのだ。あいにく、幼少ちいさかつたわたしは、美しかったお嫁さんのお八重さんの方を見ないでしまつて、憎らしいおばあさんの方を見たことがあるが、そのお姑しゅうとさんの方も顔にハツキリした記憶が残らないで、話の方が多く頭のお皿のなかに残されている。尤も、ほんとの主題は、この二人の方でなくて別にあるのだから、どうしてもよいというものの、事實は決してつくりごとではない。しかも一つ家に姉妹とよばれた人が、お八重さんに同情してよく繰りかえして話してくれたことで、おばあさんの方の話は、その当時あまり有名で、子供のあたしたちは聞くのも煩うるさいものに思っていたほどであった。

明治二十一年ごろ、東京の芝居は、大劇場に、京橋区新富町しんとみ

の新富座、浅草鳥越の中村座、浅草馬道の市村座。歌舞伎座が廿二年に出来るまでは、そのほかに中芝居ちゆうじゆに、本所の寿座ことぶきと本郷の春木座、日本橋蠣殻町かきがらの中島座なかじまと、後に明治座になった喜きしよ昇座うだけだった。劇場こやはちいさくとも中島座や寿座の方が、喜昇座より格がよいかにさえ見えた。浅草公園の宮戸座や、駒形の浅草座などは、あとから出来たもので、数はすけなかつた。

そのころの中島座には、現今いまの左団次の伯父さんの中村寿三じゆさぶ郎ろうや、吉右衛門きちえもんのお父さんの時蔵や、昨年死んだ仁左衛門にざえもんが我が当とうのころや、現今いまの仁左衛門のお父さんの我童がどうや、猿之助えんのすけのお父さんの右田作時代うたさく、みんな、芸も、顔もよい、揃はつて覇氣はきのある、若い役者の大役を演じるところだった。そこに、後に工左衛

門となつた、市川鬼丸きがんという上方かみがたくだりの若い役者がいて、唐と
うなすや茄子屋なすやという、落語にもよくある、若旦那やつしが、馴れぬ唐茄
 子売をする狂言が当つて、人氣が登つて来たが、坊主頭の女隠居
 がついているというので、大變やかましい取り沙汰になつた。そ
 の当時、そうしたみだらごとで、女隠居の名が新聞に出るとい
 ことなどは、この物堅い大店町では、實際たいした内面暴露なの
 であつたが、ものに動じない女隠居は、資産かねのあるにまかせて、
 堀留から蠣殻町まで、最も殷賑いんしんな人形町通りを、取りまき出入
 りの者を引きしたがえて、廓くわのなかを、大尽だいじん客がそぞめかすよ
 うに、日ごとの芝居茶屋通いで、世間のものを瞳どうもく目させたのだ
 った。男妾めかけ——いやな字だが、そんなふうにも書かれた。男地獄おじごく

——そんなふうにも言われた。だが、幼いものには、なんのことだかわからないが、憎々しい坊主女だとは思った。

このお婆さんが、人もなげな振舞いを、当主がどうして諫められないのかといえ、実子ではなかつたのだ。二人生んだ子を、二人まで死なせてしまつて、養子をしたのではあり、このお婆さんと、死んだ連つれあい合とが、前にいつた大長者格の呉服問屋、丁ちようぎんぎん吟からのれんを貰つて、幕末明治のはじめに唐物屋を開いたのが大当りにあつて、問屋まちに肩をならべ、しかも斬ざん新しんな商業だけに、横浜の取引、外国人との接触などで、派手であり暮しむきも傍若無人な、金づかいのあらいものだつたのだ。

お婆あさんは頭のおさえ手がなく、鼻息のあらいのは、その辺

の御内儀とちがつて、成上り者だったのだ。この女は、生れたのが葺屋町——昔の芝居座の気分の残る、芸人の住居も多く、芳町よしは、ずっとそのまま花かりゆう柳明暗の土地であり、もっと前はもとの吉原もあつた場処ではあり、葺屋町は殷賑なところで、その古着屋の娘に生れた、おつやというのがそのおばあさんの名だったが、役者買いと嫁いじめで、人よんで「鬼眼鏡」と綽名あだなした。

その女が若い盛りに、杉の森の裏小路で、長唄のお師匠さんをしていた時分、若い衆であつたお店たなの人甚兵衛さんが思いついて夫婦になり、当時の開港場横浜取引の唐物屋になつたのだ。この鬼眼鏡にらに睨まれて、三十歳になるかならずで、明治廿二、三年ごろに死んだお八重さんは、神田ツ子だった。下駄げたの甲羅問屋の娘

さんで、美しいので評判な娘だったのを、鬼眼鏡が好んでもらったのだが、実家には継母ままははで苦労し、そこでは鬼眼鏡に睨み殺された。と、いうと、おだやかでないが、陰気で、しなやかに撓むたわ、クニヤクニヤした気象の女ひとだったら、どうか我慢も出来たであろうが、お八重さんが、サツクリした短所も長所も、江戸ツ子丸出しの気性さがだったのだから、その嫁と姑のやつさもつさが、何処どこやら、今から見ると時代ばなれがしている。

鬼眼鏡おばあさんのおつや、世間でやかましい鬼丸との評判を、嫁にきかせまいとするので、嫁の外出はすつかりとめて、しかも嫁いじめの手は、雪が降る日には、店の者も奥の者も、みんな、およそ雇人やといにんと名のつくものは一人残らず中島座の見物にやり、

土間（客席のこと）の柵ますを埋めさせる。そのあとで、風呂にはいりたいたいだす。それも、折角だから、雪風呂にはいりたいたいって、雪を嫁さんに搔かきあつめさせて沸わかささせる。今日のようにガスや、石炭などはない、薪まきで燃す時分である。

だから、お八重さんは、勝気な血がどうしても鎮しずまらないと、生の好いきい鰹かつおを一本買って腸わたをぬかせ、丸で煮て、ちよつと箸はしをつけたのを、下の者へさげたりする。あるときは、大丸（有名な呉服店）へ、明石の単衣物ひとえを誂あつらえて出来上つてくると、すぐさま、たとう紙から引出して素肌すだに引っかけ、鬼眼鏡の目をぬすんで、戸棚の中へはいつて昼寝をする。一度でも、好みの衣類いりに手を通したよろこび——それで堪たんのう能うしていたのだった。

唐物屋は——小売店の唐物屋は、舶来化粧品から雜貨類すべてを揃えて、西洋小間物雜貨商などののだが、問屋はその他、かなきん金巾やフランネルの布地きれじも主おもであり、その頃の、どの店でも見ない、大きな、木箱に、ハガネのベルトをした太ふとびよう鋏はさのうつつである、火の番小屋ほどもあるかと思われる容積の荷箱が運びこまれて、棟の高い納屋ガスを広く持ち、空あきばこ函こをあつかう箱屋までがあつて、早くから瓦斯ガスやアーク燈を、荷揚げ、荷おろしの広場に紫つぽく輝かしたりした。構えも大きく広やかだった。

それにつづいて、見かけは唐物問屋ほど派手ではないが、鉄物——古鉄もあつかう問屋がめざましく、揚ようよう々ようとしていた。ドル洋銀

相場での儲けは、商業とともに投機的で、鉄物屋の方が肌合が荒かつたかともおもわれる。いつてみれば唐物屋はインテリくさく、鉄商は鉄火だつた。

この、鬼眼鏡おつやを学ぶのが、鉄屑肥りの大内儀さんであつたのだ。

前承のおおかめさんは、たしかに鬼眼鏡の有名な遊興によつて、発奮したといつてもよいのは、彼女も八丁堀の古着やの娘であつたし、俺も働いて資産をつくつたのだという威張りど、亭主が、横浜まで裸で、通し駕籠にのつて往来したというほど野蠻で、相場上手だつたので運をつかんだのだが、理想が鬼眼鏡だから、自分もそうした人気者を鼻根にしようとした。

「おい、この子は、どこの娘だ。」

「あたいの娘だよ。」

「嘘うそ言え、手めえの面にきいてみる。」

「ほんだよ、末の娘だあね。」

「ごらんじゃい、まあ！ あんまり乱暴におはなし遊ばすので、このお娘こが、はは様のお顔を、びっくりしてごろうじる——」

まったくわたしは吃驚びっくりして！ 母などとは、きくもいまわしい、汚ない、黒いダブダブ女を瞪みつめていた。

ここで、わたしという、あんぽんたん女史とお十歳か十一歳の、ぼんやりした映像をお目にかける。厳しい祖母の家庭訓に、こんな

会話の場所へ連れだされても、みじろぎもしないで坐っているの
 だったが、鉄屑かなくそぶとりのおおかみさんの死んだ末っ子と、おな
 じ年齢としだというので、ちよつと遊んだこともあつたので、思い出
 してしかたがないから、浅草観音かんのんさま様への参詣おまいりにお連れ申した
 い、かしてくれと申込まれて、いやいやながら、親のいいつけに
 より伴われて来たのだが、そこは観音様ではなく、芝居がえりの、
 料理屋の座敷だつた。

あたしたちが座蒲団に乗ると、すぐ間もなく、テラテラした、
 金壺かなつぼまなこ眼まなこで、すこしお出額でこの、黒赤い顔の男——子供には、女
 も男も老人に見えたが、中年人だつたのかもしれない——柔らか
 い袴はかまを穿はいて、黒い手提げさ袋をさげてはいつてくると、座蒲団の

上に突つたまま、あんぽんたんを見てそういつたのだった。

と、大女房おおかめさんが、衣紋えもんをつきあげながら甘つたれて言つたのだ。あたいの娘だと――

あんぽんたんの憤懣ふんまんは、それつきり、ものを食べなくなつてしまつたのだが、大人おとなはそんな感情がわかるほど、しつとりとしていなかつた。乾ききつた人たちだつた。

青黄ろい、横皺の多い、小さな体で、顔が、ばかに大きく長目な、背中をわざと丸くするような姿態しなをする、髪の毛が一本ならべて嘗なめたような、おおかめさんのお供をしてきた大番頭の細君は、御殿づとめをしたという、大家の女房さんたちのするような、ごらんじやい言葉で、ねちねちものをいって、その場をとりな

すのだった。

「ほんとにおめえの娘なら、亭主の子じゃあねえな、おれんこへよこしな、みっちり芸をしこんで——」

「芸者に売るんだろう。」

「まあまあ、何をおっしゃるやら、以前いぜんのようには、茂々しげしげお目にかかれませぬに——」

そういう大番頭夫人の顔を、いつぞや、見世ものでみた、※々《ひひ》のような顔だと、あんぽんたんは見ているうちに気味が悪くなった。

「しげしげお目にかかるんじやあ、おらあ、生きてるより死んだ方がいい。」

「あんな、もう、憎て口を——」

大番頭夫人は口で憎がるが、おおかめさんは機嫌よくお杯口を重ねて、お酌をしたり、してもらったりしている。

「次の狂言には、何をやるのさ、お前さん。」

「八百屋の婆あだよ。」

「まあね、さぞ、およろしかろうね。」

大番頭夫人は、小さな丸鬚まるまげとはつりあわない、四分玉の珊瑚さんご珠じゆの金脚で、鬚の根を搔かきながらいった。

「厭味いやみな婆あにすりやあいんだから、よくなくてどうするんだ。手近に、そのままのがあるじゃあねえか。そっくりそのまま真似ときゃあ、すむんだ。」

ぼんやりと憤っているあんぽんたんの顔を見て、あごで、そら、そこにね、というふうにおおかめさんの方を、しやくつて示しながら、その男は上機嫌に笑った。もの言いより賤いやしくない態度で、鋭い毒舌だった。

「おい、おさつさん、八百屋が出るようだったら、衣類きものをかりるぜ、今着ているのを、そのままでもいいや。」
と、猪首いくびで、抜き衣紋えもんをするかたちを、真似て見せた。

あたしは、この肥ふとつちよのおおかめさんに、おさつさんという名があるのを、不思議な気もちできいていた。

——この、不思議な会話を、後日思出したときに、幼いころの、この謎なぞのようなことばが、やっと解けたのだった。八百屋の婆と

は『心中宵庚申』の八百屋半兵衛の養母の役でいろぶかい
 姑しゅうとばば婆あのことであつたのだ。その時の、袴はかまをはいた、色の黒
 い中年男は、中村勘五郎といつた皮肉屋で、浅草今戸に書画や骨
 つとう董の店を、後になつて出したりした、秀鶴しゅうかく仲蔵なかざうを継ぐはず
 の俳優やくしやだつた。彼は、鼻眞ひいきの女客を反そらさないようにしながら
 も、なかなか傲岸ごうがんで、しやれのめしていたのだつた。

もし、この女客——八百屋半兵衛の養母の拵こしらえ、着附きつけを、
 すこし委くわしく述べるとすると、黒縹じゆす子の襟えりのかかつた南部ちりめ
 ん、もしくは、そのころは小紋更紗こもんさらさも流行はやつていた。友禅ゆぜんの長襦じ
 袢ゆばんのこともあつたが、売出されたばかりの、ごく薄手うすての上等の
 英ネルの赤いのを胴たうにした半じゆばんへ水色みづいろつぽい友禅ゆぜんちりめん

の袖をつけて、あわせ 袷仕立にした腰巻き——塵ちりよけともいうが、白や、みずあきぎ 水浅黄のゴリゴリした浜ちりめんの、湯巻きのこともある。黒ちりめん三つ紋の羽織、紋は今日日きょうじつとおなじ七ぶ位ぶだった。そのあとで、女でも一寸いっすんいちぶ一ト位まで大きくなって、またあともどりをしたのだ。しかし、そのまた前まで、ずっと昔から大きいのがつづいていたのだったようだ。

おおかめさんの体重めかたは、年をとっていたから、十八、九貫ぐらいたったろうが、そのかわり皮膚がひろ拡がって、どたりとしていたから、お腹なかの幅や、長く垂れた乳房ちぶさの容積などは、それはたいしたものだねずみ。鼠ねずみちりめんへ宝づくしを細かく縫にしたじゅばんの半襟は、一ぱいにひろがって藤色の裏襟が外をのぞいている。

その間からお酒に胸^{むな}焼けのしている皮がはみだすのを、招き猫の
ような手付きで話をしながら、時々その手で、衣^{えもん}紋を押上げるの
だった。羽織の紐^{ひも}が門^{かど}のように、一文字に胸を渡っていた。

おおかめさんの顔で目立つのは、額と頬つぺたの広々とした面
積で、高く盛上っている。口も反^そつて分厚な、大きな唇をもつて
いた。そのかわりに、謙^{けん}遜^{そん}すぎるのが鼻と眼だった。眼は小い
さいばかりでなく、睫^{まつげ}毛が、まくれこんでいるので——トラホー
ムだったのかもしれない——小さいばかりでなく、白っぽく、
光りがなくて、そのくせ怖かった。まわりからくる体つきの愛^{あい}
嬌^{よう}で、ニコニコしているように見えたが、眼は決して笑ってい
なかつたその眼の無^ぶ愛^{あい}想^{そう}をおぎなつて、鼻が親しみぶかかった。

お団子を半分にして、それを拇おやゆび指でおしつけたように、押しつけたところがピタンとしている。大きな鼻の穴が、豎たてに二つ柿かきのたねをならべたように上をむいている。

頭は、薄い毛の鬢びんを張つて、細く前髪をとつて——この時分、年配者は結上げてから前髪の元もと結ゆいをきつてしまつて、鬢びんの毛と一緒に束髪かみたいいに搔かいていたのだが——鼈べつこう甲くしの櫛くし、丸まるまげ鬚まげの手がらは、水色のこともあれば藍あい色のこともあつた。プラチナの細い上へ、大きく紫つぽいダイヤが、総彫刻の金指輪のとなりにあつて、すぐわなない手の上で、迷惑そうに光つていた。

小紋更紗といえは、この、中村勘五郎の息子に、銀之助という少年役者が、その日、芝居の見物をしていた棧敷さじきの裏へ挨拶に来

ていた。そのころの劇場は、当いま今の一階椅子席——一等席から二等席の方へかけて、ずっと細長く、豎に半間はばよりすこしゆるめに、長い長い溝になっていて、畳がずっと敷きつめてある。それが両はなみち花道のきわまでつづき、またそれを一コマずつに、細いさんぎ棧木で仕切っていつて、一コマが、およそ一間の四分の一に仕切られて、その中に四つ、または五枚の座蒲団ざぶとんが敷いてある。これが芝居道でいう一いっけん間——一ひとます桝なので、場席ばせきを一間とつてくれ、二間にけんほしいなどというのだった。二間三間と陣じんどつて、ゆつくりはいりたければ、代金さえ支払えば定員だけはいらなくともよいのだし、そのかわりに子供も交ませて六人はいつている窮屈なものがある。それを一桝とれとか二桝ともいつた。棧木ませは——ツマリ仕

切りは、でかた出方——劇場員によつて取りはずしてくるから、連れであることは柵を見ればわかるのだった。役者の連中は、この長いたて豎の溝を貫ぬいて幾本もとるのと、夏などは、その役者の揃いの浴衣を着て、役者の紋のついているうちわ団扇を一人ひとりが持つているので、はな華やかでもあり、宣伝としても効果的だった。花道の外になる両側は三段、もしくはは四段のひなだん雛段式に場席がなつていて、一柵くぎりはおなじだが、これは舞台へ斜めにむかうぐあい工合で、おなじ豎に流れていながら横にならないでいる感じでならば、一段ごとにひ緋の毛もうせん氈がかかっていた。もとより、その雛段にも連中は並んだから、うおがし魚河岸とか新場とか、だいこんがし大根河岸とか、吉原や、各地の盛り場の連中見物、その他、すいぎよれん水魚連とか、ろくにれん六二連、けんれ見

連んといつた、見巧者みこうしゃ、芝居しやずきの集あまった、権威ある連中の
来た時など、祝儀しゆぎをもらつた出方でかたが、花道はなみちに並んでその連中に見
物の礼れいを述べたり、手打てうちをしたりして賑にぎわしかつた。

この雛段ひなだんを、下から、新高しんだか、高土間たかどま、棧敷さじきとなえ、二階に
あるのは二階棧敷さじき、正面棧敷さじきといつた。そこにも緋ひのもうせんが
かかっている。「助六すけろく」の狂言きやうげんの時などは、この二階棧敷さじきの頭
の上と、下の棧敷さじきの頭の上に、花のれんがさがり、提灯ちようちんが
つるされるので、劇場内は、ぐるりと一目ひとめに、舞台の場面とおなじ
調子をつくりだすので、見ている観客までがその場の、一場景に
つかわれる見物人にもなるので、浮立うたてつてくる心理が、とても、
こくのある甘さとなつて、演じる役者もみるものも、とうぜんと

酔っぱらったのではないかと思うし、昔の芝居のおもしろさは、こんなところにあつたのだなということが、今になって思われるのだった。

そうした棧敷の後の板戸を、そつと引き開けるものがあつた。

舞台に夢中になつている女たちは気がつかなかつたが、ちいさな、あんぽんたんは、透間すきま風が、おかつぱのまんなかにあけた、ちいさな中剃りなかずや、じじつ毛のある頸筋くびすじに冷たくあつたので振りかえると、つくなんでいた男が、手のついた青い籠かごの上へ、手拭袋ぬぐい包をのせ、手拭と菓子籠の間へ、ヒラヒラと、巾はば一、二厘の、丈五たけぶトばかりの赤や青のピラピラのさがつた楽屋簪がくやかんざしを十本ばかりはさんだのを、棧敷の中へ押入れるようにしていた。

と、おとなたちも気がついて、振返えると、また二、三寸板戸の開きがひろげられて、そこへ、他の男おとこしゆう衆しゆうを供につれた銀之助が来たのだった。あの黒い、眼の鋭い、お出額でこの役者の子だとあとでできたのだが、この子は葱ねぎのような青白さで、あんぽんたんが覚えているのは、薄青い若草色の羽織と、薄柿色かきの着もので、羽織とおなじ色の下着を二枚重ねて着ていた。あたしが家うちへおくられて帰るときに、その青籠入のお菓子と、手拭と、楽屋かんざしをそっくりつけてよこしたので、家うちのものがいろいろその日の様子をきいたおり、その葱のような役者が、この贈りものをもつてきたのだといったらば、それが中村銀之助という子役だと、母たちがいつていた。

簪かんざしは鶴がついているのと、銀杏いちょうの葉とのがあつて、ピラピラに、舞鶴まいづるや、と役者の屋号を書いたのと、勘五郎としたのと、銀之助と書いたのが交まじっていた。手拭袋てぬぎのもようと色とが、銀之助が着ていた着物とおなじなので、思ひだして話すと、これは、鶴つる菱びしというので、舞鶴屋の紋でもあると祖母がおしえてくれた。そしてその着物のことを、染めさせた小紋であろうといっていたので覚えてしまったのだった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼眼鏡と鉄屑ぶとり

続旧聞日本橋・その三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>